

ジンメルとディルタイの認識論の比較研究

——19世紀後半から20世紀初頭ドイツの人文社会科学における社会学の意義——

早稲田大学 大窪彬夫

1 目的

本報告の目的は、ジンメルの社会学を19c後半～20c初頭ドイツの人文社会科学の潮流に位置づけ、その社会学の意義を理解することである。本報告では、これをディルタイとジンメルとの比較により行う。周知のように、ディルタイは社会学を否定し、ジンメルは社会学を肯定する。ただし両者は社会を諸個人の相互作用からなるとする点で共通する。両者の相違はどこにあるのか。両者の認識論の比較を通じて検証する。その上でジンメルの社会学の意義を考察する。

2 方法

本報告は2つのアプローチをとる。第1に、ディルタイとジンメルに共通の歴史的背景の提示である。まずシュネーデルバッハ (Schnädelbach 1974=1994) に依拠しヘーゲル以後のドイツ人文社会科学の潮流を確認、次に1880年代のドイツ人文社会科学の課題を確認する。第2に、この潮流・課題に対するディルタイとジンメルの認識論の比較を通じ、ジンメルの社会学の成立の意義を理解する。これは『精神科学序説』第1巻第1部 (Dilthey 1883=2006)、『歴史哲学の諸問題』 (Simmel [1892]1922=1977)、『社会学』第1章 (Simmel 1908=1994) の再読により行う。

3 結果

ヘーゲル以後ドイツ人文社会科学は〈歴史哲学への懐疑〉という理論的状況に置かれる。1880sに懐疑は一層深まり〈歴史的理性批判〉となる。その際「社会」「カントの認識論」「生」が焦点となる。〈歴史的理性批判〉は、歴史的社会的現実の学の確立の為、カントの認識論の枠組を拡大し継承する。その際ディルタイとジンメルは共に、人間の活動全体を提示可能な〈生〉概念に着目する。ディルタイは〈歴史的生〉に依拠し、全体的人間の心理学と歴史的社会的世界の全体への解釈学からなる精神科学を展開する。ジンメルは、カントにおける認識の制限を〈認識を制限する活動／制限を乗り越える活動〉に読み替え〈生〉とする。これに依拠し、〈歴史法則を無限に追求する科学／科学の彼方にある歴史の意味の把握〉という形で歴史認識論を構成する。以上の相違が社会学の見方の相違をもたらす。ディルタイは彼の全体論的考察の中で社会論を補助学とする。ジンメルは制限し乗り越える活動を諸個人間の相互作用にも見出す。ここにジンメルの社会学が成立する。

4 結論

ディルタイの全体論的な精神科学との比較の結果、ジンメルの社会学は全体性への批判的考察として意義を持つ。ここにヘーゲル以後の人文社会科学の転換点、20cの社会学への転換点がある。

文献

Schnädelbach, H. 1974 *Geschichtsphilosophie nach Hegel*. Verlag Karl Alber GmbH. (=古東哲明訳, 1994, 『ヘーゲル以後の歴史哲学』法政大学出版局.)

Dilthey, W. 1883 *Einleitung in die Geisteswissenschaften*. (=牧野英二編集/校閲, 2006, 『ディルタイ全集 第1巻 精神科学序説 I』法政大学出版局.)

Simmel, G. [1892]1922 *Die Probleme der Geschichtsphilosophie*. (=生松敬三・亀尾利夫訳, 1977, 『歴史哲学の諸問題』白水社.)

——— 1908 *Soziologie*. (=居安正訳, 1994, 『社会学』白水社.)